

呉越の仏舎利信仰と鏡像の伝播

谷口 耕生 (TANIGUCHI Kosei) 奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長

主な著書・論文

- ・「総説 聖地寧波をめぐる信仰と美術」(特別展図録『聖地寧波 日本仏教1300年の源流 ~すべてはここからやって来た~』、奈良国立博物館、2009年7月)
- ・「菩提僊那と古密教の美術」(『正倉院に学ぶ』、思文閣出版、2008年10月)
- ・「国宝 薬師寺所蔵麻布著色吉祥天像」(『国宝 麻布著色吉祥天像』、中央公論美術出版、2008年3月)
- ・「総説 神仏習合美術に関する覚書」(特別展図録『神仏習合 かみとほとけが織りなす信仰と美』、奈良国立博物館、2007年4月)

呉越国最後の国王である銭弘俶は、古代インドのアショーカ王がインド全土に八万四千基の仏舎利塔を建立したという故事に倣い、領内にあった明州(寧波)阿育王寺の塔を模して八万四千の仏舎利小塔を造立した。この銭弘俶塔(あるいは阿育王塔)と通称される仏舎利小塔は、呉越仏教を象徴する聖遺物として五代・北宋期に建立された仏塔の地宮から多くの出土例が報告されている。この銭弘俶塔については、10世紀にはその一部が日本にも請来されていたという記録があり、実際、金峯山経塚や那智経塚という平安時代の代表的な経塚からも出土していることは大変興味深い。近年、弥勒下生時まで三宝を保持する空間という日本の経塚の性格が、呉越・北宋の仏舎利塔地宮造営のあり方を移植したものであるという指摘がなされており、両者からは仏舎利・仏像・経典など極めてよく似た遺物が出土している。経塚から銭弘俶塔が出土することは何よりもそのことを雄弁に物語っていよう。

そこで注目したいのが、呉越の仏舎利塔と日本の経塚のいずれからも出土する鏡像の存在である。鏡像とは鏡の表面に仏像や神像を線刻して表したものをいう。制作年の判明する初期の鏡像の作例は、10世紀の呉越地域(現在の浙江省・江蘇省)に造営された塔地宮の出土遺物に集中しており、そこには本来目に見えないはずの仏の法身を鏡の中に観ずるといふ、この地域の仏教に多大な影響を与えた天台教学の仏身観が濃厚に反映されていると考えられる。こうした呉越の仏舎利塔地宮を移植する形で出現する日本の経塚は、藤原道長の発願によって造営された11世紀初頭の金峯山経塚をはじめ、その初期においては天台僧が深く関与していた。そしてそこから出土する鏡像に表される諸尊は、図像や像主選択に呉越の鏡像からの影響を指摘することができるのである。

本報告では、呉越の仏舎利塔埋納遺物として発生した鏡像が、呉越の仏舎利信仰の広まりとともに同時代の遼・高麗そして日本の経塚にまで伝播して行く様子を概観していく。その上で、日本独自の発展を遂げた鏡像として評価されることの多い蔵王権現鏡像についても、呉越仏教からの多大な影響の元に成立したものであることを指摘する。